

大 博物館 だより

津山郷土博物館



▶ 鍾馗図

狩野如林乗信筆

江戸時代

(個人蔵)

「狩野如林行年七十歳筆」と署名された作品で、印章は「乗信之印」を用いる。如林最晩年の作品である。鍾馗は、疫病神を追い払い、魔を除くとされていて、大きな目にひげ

をたたえ、剣を構えた姿で描かれる。端午の節句に用いられることが多く、狩野派の画題としてもよく描かれている。

津山藩松平家お抱え絵師 — 狩野如林 —

はじめに

津山藩松平家の狩野派絵師は、狩野洞学に始まる。しかし、洞学の家は、洞学に対する「永々御暇」により絶家となり、津山藩の絵師狩野家は途絶えることとなった（拙稿「津山藩松平家お抱え絵師—狩野洞学—」『博物館だより』39号、津山郷土博物館、2003年）。元文2年（1737）7月25日のことであった。その後、津山藩では、二家の狩野家を創設し、絵師を家業とさせた。それぞれの家は、初代によって、如林系・如水系と区別することができる。ここでは、このふたつの狩野家の一つとなる如林系狩野家の祖となった、狩野如林について、主に「勤書」（津山松平藩文書）からその概要を見てみたい。

瀧波文庫

津山狩野家の祖となるはずであった狩野洞学の「御暇」により、絵師のいなくなった津山藩では、元文2年（1737）11月28日、瀧波文庫を五人扶持大役人格で召し出し、絵師として雇い入れることとした。瀧波文庫は、実は、津山藩家臣花沢久兵衛の二男で、かつて、洞学の養子となっていた人物である。その後、詳細は不明であるが、洞学から離縁されていた。

延享元年（1744）8月、瀧波文庫は処分を受け、小役人に格下げの上、遠慮を命じられた。これ以前、文庫は、洞学から狩野系図と狩野姓を譲り受けるとして願書を提出し、藩の許可を得ていたにも拘わらず、それが間違いだったということになったのである。延享元年は、洞学の死の前年であり譲られたとしても不思議ではないが、間違いの内容については、不明である。この系図については、後年に再び登場することとなる。

寛延元年（1748）7月22日には、文庫は、再度大役人格になり、大目付支配を命ぜられた。当初の格式に戻るのに4年かかったことになる。

絵師、瀧波如林

寛延3年（1750）7月1日、八石三人扶持となり、絵師を命じられた。ここで、あらためて絵師を命じられた事の意味は不明である。そして、同時に剃髪を命じられ、相応の名前に改めるよう指示されている。そこで、7月11日には如林と改名したのである。ただ、剃髪したのではあるが、後の絵師たちに見られるような「坊主」役は、ここでは見られない。また、狩野姓なしでの絵師でもある。

この年の12月24日には、宝船6枚の制作が命じられ、出来次第差し出すよう指示されているが、翌25日には提出して、金百疋を与えられている。勤書によれば、扇面であったようである。宝暦4年（1754）12月21日にも、宝船の褒美として金百疋が与えられている。剃髪・改名以前と同様の仕事ぶりが伺われる。

宝暦13年（1763）正月16日には、家業出精により、格式小従人となり、津山藩の武士身分となった。津山藩では、小従人から上が武士であり、その下の大役人や小役人は、厳密には武士ではないのである。

同年12月23日、宝船により金百疋が与えられた。また、同日、「近來度々御給被仰付候付」として、金二百疋が与えられた。明和元年（1764）閏12月23日、宝船により金百疋が与えられ、また同日、江戸表から指示のあった「御絵」を「調達」した功勞により金百疋が与えられている。こうした事例は「御用之絵致調達候付」としてよく見られる。画制作の面でもかなり忙しかったようである。

これらの記載からすると、必ずしも勤書には詳細に記録されていない絵の仕事が、しばしばあったと考えられる。こうした事実は、絵師の職務内容に関する問題点に大きく関わってくる。大名家お抱え絵師の勤務内容は、藩主の側に仕える茶坊主的な内容が中心で、年末の宝船などを除けば、署名入りの画作品の制作が命じられることは少ないとの見方もあるが、如林の場合は必ずしもそうではない。

宝暦13年の「近来度々御絵被仰付候」というのは、昇降竜二幅対など27枚に及ぶ作品のことで、それらは全て江戸に送られている。また、詳細な記載がなくても、国絵図などの実務的な用務も考えられる。そして、茶坊主的な用務の記載がないのは、茶坊主を職として命じられていないのだから、当然ともいえる。

作画の仕事のない時期には、藩主の側に仕えていたとしても、絵師という家業によって召し抱えられているのであり、その家業が第一であったことは間違いない。

明和2年(1765)8月29日には、津山藩の家臣として、久保田彦五郎跡屋敷を与えられている。

狩野如林となる

明和6年(1769)3月28日、如林は念願の狩野系図を下賜される。洞学の死後24年目のこと、如林59才であった。

この時の事情について、馬場貞観が慶応2年に書き記した「老人伝聞録」(「津山温知会誌」第1編)の「狩野如水」の項には次のように記している。

洞学の死後、狩野派は絶えていたのであるが、今町に「洞学の妾」が居住しており、狩野家系図を持っていることが判明した。そこで、藩は、系図を取り上げ、妾には生涯一人口を与え、如林に系図と狩野姓を与えたというのである。

こうした伝聞の元となった事実を伝える、『町奉行日記』(津山松平藩文書)明和6年(1769)3月13日の記事では、狩野洞学の娘が狩野系図を所持しており、内々に差し出すので、その娘の娘に一生の間二人扶持が与えられることとなったという。狩野洞学の娘は、八百屋と茂次郎の実母で、その娘は津国屋市郎右衛門の娘である。この複雑な人間関係については推測するしかないが、こうした藩の対応は、狩野系図が藩にとっていかに重要なものであったかを物語っている。

『町奉行日記』の天明7年(1787)10月朔日の記事に次のような記載がある。「津国屋みね御扶持方八狩野系図差出候義別段之訳二付引無之事鍵屋茂介勘定所二而申渡二付此方無構」とあり、狩野系図差

し出しの事実によって「みね」の扶持方は与えられており、藩の財政難を理由にして切り捨てることはできなかったことが確認される。また、勤書の如く、洞学の死後24年間も絵師狩野家がなかった点からみても、藩にしてみれば、狩野系図が行方不明となっていたというような事情があったと考えてよいだろう。

画才のない息子

一方、如林は、念願の狩野系図を手に入れたものの、実子市治には絵の才能が無かったらしく、安永7年(1778)料理方見習いとなっている。

市治は、延享3年(1746)の生まれで、友弥と名乗っていたが、明和7年(1770)市治と改名している。市治は、家業の絵を何年も修行していたが、如林に言わせると「絵心無之」という状況で、家業の相続を諦めての決断であった。

この時、市治は、既に32才に達しており、芸術的才能を見極めるにはもう既に遅いと思われる。ここまで遅れたのは、如林が家名の存続を願う余り決断がつかなかったのであろうか。

翌安永8年(1779)には、市治は改姓名を行い、かつて如林が名乗っていた瀧波姓にもどり、瀧波文庫と名乗っている。養子を取って継がせない限り、絵師としての狩野家は如林一代で絶えることとなってしまった。

しかし、藩としても絵師の家系を簡単に絶えさせることはできなかったと見えて、瀧波文庫の跡を相続する息子は、絵師として「本業取立候様可致旨被仰付」していたのであった。こうして、次世代の絵師家業を約束された上で、文庫は、料理人として歩み始めたのである。これは、藩の温情ともとれるが、同時に、家業を存続させなければならない義務を負わされたことを意味している。

このころから、如林の勤書には、料理人である文庫の動向のみが記されるようになる。当主である如林が体調を崩していたことが想像されるが、詳細は分からない。そして、天明元年(1781)11月20日、狩野如林は、71歳の生涯を終えた。

(尾島 治)

弥生土器をつくる



野焼き風景(8月11日)

◆この子供歴史教室は、弥生土器の作り方を復元しながら、弥生時代の生活や技術を学習する内容になっています。7月21日に粘土での土器づくり、8月11日には屋外での野焼きを小学5・6年生18名が体験しました。つぎに子供たちの感想文の一部を紹介します。

★土器を作るのは初めてなので、上手にできるか不安だったけど、意外とかんたんでした。つばも上手にできて、とてもよかったです。土器を焼く時はものすごく熱かったです。土器を入れたり、取ったりする人もたいへんだな—と思いました。土器が焼かれている時、赤茶色からこげて黒になって、茶色になっていくのがおもしろかったです。でも、こげてから茶色になるのが不思議だな—と思いました。土器にはいろいろな種類があり、それぞれ入れる物がわかれていることがわかり、勉強になりました。弥生土器を作ったことがある人はあまりいないので、作ってよかったと思いました。(弥生小5年 三村理紗さん)

★最初にど台作りをしました。だけどすぐにねん土がかわいて作りにくかったです。できてあちこちにいっぱいひびがあって作るのにとっても時間がかかりました。わたしが作った形はうつわのようなものと、花びんのようなものです。作るのはむずかしかったけれど、できた時はとてもうれしかったです。それから三週間土器をかわかしていいよ焼きました。でもその時に温かい風がこっちにふいてきてとても暑かったです。その時焼いている土器はすぐに黒くなりました。赤い色になれば焼けているということだけど、それがなかなか赤色になりませんでした。ずっと待っているやと土器が焼きあがりました。その時はとてもうれしくなりました。作ったのは初めてだったのでとてもいいけんになりました。(佐良山小5年 多田彩加さん)

★土器を作るのは、最初はむずかしそうと思っていたけど、けっこうかんたんだった。そこを作って、丸くしたのをどんどんかきねて土器を作るなんてびっくりした。やくのは、けっこうかんたんだったけれどあつかった。夏に、たきびをしたのでよけいあつかった。黒くなくてもまだやきつづけて、オレンジになるまでやきつづけるなんて、よく昔の人はわかったなと思った。昔の人は、くろうして土器を作っていたんだなと思った。とても楽しかった。(北小5年 西崎晃太郎君)

★僕は土器を二つ作りしました。一つははちで、もう一つはたかつきです。作りはじめたときはむずかしそうだなと思いました。けど、最初作ったのは簡単でした。でも、次に作ったたかつきはとてもむずかしかったです。弥生土器を焼く日がきました。みんなのを見たらほとんどのがはちを作っていました。そして外に出て焼きました。僕のを見ているとはちは無事でした。たかつきを見ていると最初は全然こわれていませんでしたが、また後で見ると、こわれていました。でも、僕のたかつきが板の上ののっていたので見てみると、前よりもこわれていました。僕はこんなにむずかしいのをよく昔の人は作れたなあと思いました。またもっといい弥生土器を作りたいです。(高田小5年 福井悠介君)

★私はこの教室に参加して、土器作りのむずかしさを知りました。とくにそれを女たちがやるというから大変！昔の女たちはこのあつさにたえられたのでしょうか？本で見たりすると、一見かんたんそう土器作り。でも、やってみると意外とむずかしかったです。しかも土器が作れないといちにん前の女とみとめられないから、もうそりゃなんでも失敗する人なんかは必死になってやっただけでしょうね。とてもむずかしい土器作り。そんなことをやりとげる昔の女たちは、すごいなあと思いました。(鶴山小5年 池内伽奈子さん)

★土器を作る時、とても楽しかったです。形を作る時何にしようかまよいました。でも最終的には、自分で考えたオリジナルを作りました。2時間かけて作ったので手がだるくなつたけど、がんばりました。次に焼きました。火と日ざしでとても暑かったです。自分のはわれないかな？だいじょうぶかな？と心配だったけどちゃんとできてよかったです。弥生時代の人は、こんな大変な作業を毎日すごいなあと思いました。(鶴山小6年 寺尾真由香さん)

★夏休み歴史教室で土器を作る時に、かんたんそうだったけど、むずかしかったです。弥生時代にあった物などですごいと思った。作る時に、早くこねないとかたまってしまうので、早くこねました。はじめてなので一番かんたんのはちを作りました。どんどんかきねて、形をととのえました。ととのえる時、ちょっとたいへんでした。かたまってきたので、少し水でぬらしてからまたととのえました。弥生時代の人は、土器をつくるのに、すごくたいへんだと思います。土器を焼く時とても暑いので、とりだす時もたいへんです。焼けて取り出す時に、私はまだ！こしかでいてませんでした。休んでいて見に行くと見ると全部できていました。ひびわっているがしんはいいだつたけど、われてはいませんでした。この土器作りをしてとても楽しかったです。(林田小6年 村田早奈美さん)

★土器作りはかんたんそうだったけど、いがいにむずかしかった。土器は弥生時代につくられたものです。私は弥生時代を社会で勉強している時「弥生土器をつくってみたいなあ。」と思っていました。そしたら友達がさそってくれたのでとてもうれしかったです。でも実さいやってみると、形をととのえたりするのがむずかしかった。私は弥生時代の人はすごいなあと思った。土器をやく時はとてもあつかった。弥生時代の人もとてもあつち中、がんばってやっていたと思います。私達もあつち中がんばりはりました。形がくずれてなくてよかったです。弥生時代の人はこれをお血やなべにしてつかっていた。私は今とまったく違うお血やなべだなあと思いました。また、つくれる時があつたら大きなものをつくりたいです。(林田小6年 藤井美幸さん)

博物館入館案内

- 開館時間：午前9:00～午後5:00
- 休館日：毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
- 入館料：一般 210円(160円)
高校・大学生 150円(120円)
中学生以下 無料
※()は30人以上の団体

博物館だより No.48 平成17年10月1日発行

編集・発行：津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
☎(0868)22-4567 FAX(0868)23-9874
E-mail: tsu-haku@tv.tn.ne.jp
印刷：有限会社 二葉印刷

★は津山松平藩の植印で剣大といい、現在津山市の市章となっている。